



桜花会 同窓会誌



本年度5月に竣工した東2号館
(本館と南1号館の間)



大岡山駅前に新たに出現した TOKYOTECH FRONT

2009年10月発行

桜花会 同窓会誌 目次

■ 巻頭言	桜花会会長	堀尾 哲一郎	2
■ 異動教員から			
大岡山での三年間		山本 芳彦	4
南1号館の思い出		中山 将伸	5
さようなら”team570”		伊藤 正人	7
■ 新任教員挨拶			
		飯島 悠介	10
■ 研究室紹介			
岡本研究室		岡本 昌樹	11
■ 卒業生から			
2009 Silicon Valley 状況		石井 義行	13
■ 同窓会報告			
昭和37年化学工学課程卒業生同窓会報告		小野 嘉夫	16
■ 最近の大学から			
応用化学専攻の今は？		和田 雄二	17
百名山病		佐治 哲夫	19
感謝百万遍		中森 建夫	20
最近思うこと「今どきの若い者は・・・」		山中 一郎	21
■ 桜花会賞受賞者の声			23
■ 学生と卒業生との交流会のご案内			29
■ 桜花会総会・工大祭企画のご案内			30
■ 会員の声			31

巻頭言

桜花会会長 堀尾 哲一郎

横山亮次並びに古川昌彦両大先輩会長のもとで、平成12年度から副会長として桜花会活動の一翼を担ってまいりましたが、平成21年度総会(21.6.12.)で、皆様のご推挙により会長を拝命致し、その重責をひしひしと実感しております。ふりかえると、東工大は創立130年になりますが、応用化学コースは歴史・規模とも最も古く最大のコースの一つであります。この間、その同窓会組織である桜花会は車の両輪のごとく協力し合ってまいりました。しかし、社会の要請の変遷により講座組織が大きく変動し、同窓会組織も変動を余儀なくされました。この間、教育・研究でご多忙の先生方はじめ大学関係者に多大のお世話になり厚くお礼申しあげます。一方、我々の周囲を眺めると、化学製品は、われわれの便利で快適な生活の基盤となっており、同窓生の多くが化学工業、製薬、食品など幅広い分野で、新製品の研究開発、製造など新製品の開発、品質の向上、安全性の確保などに貢献しております。大学全体に目を転じますと、2008年の英国の調査機関による世界大学ランキングで、世界61位、工学系で21位、日本の大学では、総合4位、工学で2位にランク付けされております。この結果は大学関係者の努力の賜であります。この地位を向上させるためには同窓生を含めた一層の努力が必要であります。平成16年4月1日の国立大学法人化後、大学運営の自由度が増す一方、資金面と知識面で大学間競争にさらされることになりました。この競争を克服するには、伊賀健一学長が力説されるように大学関係者のみならず卒業生を含めた総合力が求められます。いわゆる同窓力の重要性です。我々卒業生は卒業以来、好むと好まざるにかかわらず、一貫して東工大という看板を背負って生きてきたと言えます。また、周囲もそのように見えています。同窓生としての貢献が重要です。また、平成21年5月には大岡山駅前に東工大と蔵前工業会が共同で建設した東工大蔵前会館(Tokyo Tech Front)が竣工し、卒業生のネットワークを広げる橋頭保ができました。



桜花会の最近の活動をまとめると(1)教育奨励事業(例:国際学会で発表する学生に対する資金補助など)、(2)優秀な卒業論文発表に対する桜花会賞

の選考・授与、(3) 卒業生祝賀パーティ協賛、(4) 学生への企業紹介、(5) 桜花会誌の発行(年1回)、(6) 講演会、オープンキャンパスなどの企画、実施などではありますが、蔵前工業会やその支部との協力による同窓生間の交流や企業のご協力による見学会の実施、学生と企業との情報交換の橋渡し、インターンシップのお手伝いなど活動の幅を広げることも重要です。

組織の活性化は事業企画力と情報伝達力に負うところが多く、桜花会もその例外ではありません。これらの強化については役員全員が役割を分担して当たる必要があります。一方情報伝達力の充実については電子メールリストの整備やホームページの活用が重要であります。

卒業生にとって母校が世界の中で輝ける存在であり続けることは誇りであり、人材面・資金面で多くの会員に参加して戴き、お世話になった大学に恩返しする風土・文化を築くことが大事だと思います。会長として微力ながら全力を尽くしますので、皆様のご支援・ご協力を宜しくお願い致します。

異動教員から

昨年度に応用化学専攻から異動された山本芳彦先生、中山将伸先生、伊藤正人先生の三人から、東工大を去るにあたってのメッセージやご近況などをいただきました。専攻の教育研究にご尽力されてきた両先生には応用化学専攻一同、心から感謝するとともに、新天地でのご活躍をお祈りしております。

■大岡山での三年間

山本 芳彦（名古屋大学大学院工学研究科・准教授）

皆様お元気でしょうか？東工大を去り既に半年が過ぎようとしています。こちらに慣れてきたこともあり、もう大岡山での生活が遠い昔のここのように懐かしく思えます。三年の赴任期間は想像していたよりもずっと短く、現実のことではなかったかのようにさえ感じます。

現所属である西山久雄教授のグループに助教授として加わって一年半が過ぎ、何か新しいことをやらねばと焦っていた頃、“三大学交流プログラム”が正式に始動しました。前例も無く不確定要素ばかりでしたので絶対に初年度は避けたいと思っておりましたが、応募せよとの天の声（悪魔の囁き？）がありました。ただ、どうせ行くなら憧れの大岡山へと既に心に決めていました。筆者と同世代の研究者には、高尾俊郎先生を筆頭に東工大出身者が大活躍されています。そうした方々から異口同音に、大岡山では研究室・学科の垣根を越えた交流が盛んで、大いに刺激をうけて研究生活を送ってこられたと聞き、大変羨ましく思ったものです。ですから、一研究室に限定して所属せず、あえて独立して様々な分野の研究者と交流をもち、新たな道を切り開くきっかけを掴みたいと考えたわけです。ところが実際に採用され赴任してみると、こうした考えは東工大側“プログラム”関係者には全く伝わっておらず、独立研究室を運営することに関してきついお叱りをいただきました。このまま三年間過ごしても無駄であり、皆に多大な迷惑がかかるとさえ言われ、期待を胸に着任して早々大きな挫折を味わいました。

そうした“招かれざる客”に対しても、応化専攻の皆様は暖かい手を差し伸べてくださいました。紙面が限られておりますのでお世話になった方々のお名前をお一人ずつ挙げることはできませんが、皆様のご厚情には心から感謝しております。筆者の“わがまま”を受け入れ、独立の研究室や宿舎を確保いただき、様々な分析機器も自由に使用させていただきました。また不慣れな筆者に事務手続きなど親身にご指導いただき、無事三年間を終えることができました。

同世代の友人たちには研究や学生の指導等、さまざまな悩みごとを時間を惜しまず議論・相談させてもらいました。仕事に行き詰まったときには、南1号館5階に上がっていきますと、いつでも貴重なご助言と叱咤激励を頂くことができました(それ以上にお酒を頂いたような気がします)。理学系化学科の方々とも大いに交流させていただきました(いろは・利休にて)。

三年間をもう一度振り返りますと、研究に関しては目覚ましい成果をあげたわけでもなく、お前の“プログラム”は失敗だったと言われても仕方ありません。しかし、この大岡山で、良き師(お前を弟子にした覚えはないとおっしゃるでしょうが)・良き友に出会えましたことは、筆者にとって貴重な財産となりました。優秀な学生たちと日々切磋琢磨したことも、これからの研究・教育人生に大きなプラスと成ることでしょう。これは是非とも言わせていただきたいのですが、応化の学生は本当にすばらしい。常に礼儀正しく、学業にひたむきに取り組む姿に感銘を受けました。もちろん東工大に入ってくる学生が素直で優秀であることは第一因ではありますが、それ以上に応化の皆様がそれぞれの立場や研究室の垣根をこえ、一丸となって教育に邁進された成果なのだと確信しております。学生同士の上下・横のつながりも強く、そうした教育がうまく伝播していくのだと思います。どうかこれからも教・職員と学生の皆さんが一体となって、“人と人のつながり”を尊重する応化専攻の良き伝統を守ってってください。自身もこの伝統の恩恵に浴することで、三年間を乗り切れたのだと今しみじみと感じています。最後に、筆者の研究室に来てくれた9名の学生たちに感謝いたします。とくに初年度から三年間を共に過ごした糸永・喜来・山下君には感謝の言葉が尽きません。心より御礼申し上げます。

■ ■ 印象深い二人の理工人の思い出

中山 将伸 (名古屋工業大学大学院工学研究科・准教授)

平成21年5月1日より名古屋工業大学に異動しました。応用化学専攻協原研究室の助教として約4年半、学生時代を通算すれば約15年も東工大で過ごしたことになります。現在34歳ですから、私にとって15年は長い年月です。この間、お世話になりました協原先生をはじめとする応用化学専攻の先生方、事務員・秘書の方々、学生さん達、また桜花会の皆様に御礼を申し上げます。

さて今回、本誌に寄稿する折角の機会を頂けたので、東工大の思い出や名工大での近況を話の種に今後の抱負を述べさせていただこうと考えたのですが、実際に筆を取ると頭の中で断片的な記憶だけが思い浮かぶだけで纏まりに欠けてしまいそうです。そこで、あえて東工大に関係ないけれど、私が過去の2回

の就職体験直後に邂逅した、印象深い二人の理工人との思い出を話の接ぎ穂として、今後の抱負を述べてみようと思います。

一人は、私が修士号を得てから勤務した北陸の化学工場でお世話になった製造部の課長です。課長は当時 55 歳(?)で、地元の高校を卒業してから会社の製造現場で活躍してきた方であり、「製造部課長」という公式的で形式的な肩書きがその方の身体やパーソナリティーにじっくり調和しているような人物でした。(あえて独断・偏見的立場から説明すれば、)職人肌の無言実行、職務・職責に真摯忠実、時々そんな武骨なパーソナリティーが無用な誤解を招いてしまう人物像だと言えるかもしれません。何よりも印象に残ったことは、課長が科学に並々ならぬ情熱を持っていたことです。モリソンボイド有機化学の教科書などを独学で読み内容に通暁していたため、大学卒・院卒の技術者(私もその一人であったわけですが)も、簡単に太刀打ちできない知識と経験を持っていました。当時大学院を修了したばかりで未熟な私は、自分の東工大院卒という経歴がなにか着心地の悪いゴテゴテしたものに感じられ苦しみました。しかし、課長の下でお仕事をさせていただいていくなかで、どんな瑣末なことでも自分ができることをコツコツと丁寧で完結させていこうというメンタリティーを持つに至り、私なりに自己成長と課長からの信頼(それは、顔色から簡単に伺えるものではないわけですが)を獲得していった気がします。その後、資金を貯めて職を辞し博士後期課程に進む決意に至ったのですが、在職中、ある種の静かな環境の中で仕事にも勉強にも(自分としては)しっかりと取り組むことができ、充実した日々を過ごせたのには、その課長の存在が大きかったと思います。

もう一人の印象深い人物として紹介しようと思うのはドイツの大学の先生です。私が応用化学専攻助教に着任して間もないころ、たまたま訪日していた先生とディスカッションする偶然を得たのが関係の始まりです。その後も親しくしていただき、その縁で私自身も2ヶ月ほど客員分でドイツに滞在することもありました。私のような駆出し研究者(端的に言えば若造)とも親しく付き合っていただけのような気さくな先生ですが、学問的には物理出身でドイツ仕込みの(というのが本質かどうかはわかりませんが)熱力学と固体科学を得意としており、察せられるように緻密厳密な論理構成を大切にされる先生です。二人で趣味のように始めた固体内イオン拡散のモデル化に関する研究は、細々ながらインターネット電話でディスカッションを繰り返しながら進展させ(土台から研究をひっくり返すことも何度かありましたが)、実に3年を経て今年連名で第一報を無事出版できました。ひとつには先生の丹念でいて情熱的な姿勢のおかげで論文というカタチにできたのだと思います。歩みは遅いですが、継続

して共同研究していくことを約束しており、今後も関係を大切にしていきたいと思っています。

今振り返ってみると、ここにたまたま紹介したお二人は産業人と学者という意味でバックグラウンドが大きく異なる方々だと思いますが、本格的な科学的知識に裏付けられ、その土台の上で、丁寧かつ妥協のない思索を展開し、自らの論理構築を磨きこんでいくソリッドなメンタリティーを持った理工人だという点で共通していると思います。職務・研究においては世事の雑事・雑念から離れ、静謐な空間で思索を楽しむという技量を持ち合わせた人物であり、奇をてらうよりも事実に基づくことを好む、そこに私をひき込む魅力がありました。

私は世柄を評するほどに経験を積んだ人間ではありませんが、時として「プレゼンが上手」で「空気が読める」ような「要領のよさ」が過剰に尊重される雰囲気を感じることもあります。しかし、お二人のような地道ながらも理系人としての「本格的性」に裏付けられた人物こそが私の目指す理工人像ではないかと思っています（注：お二人とも職場と研究の最前線でリーダーシップを取られている人材で、要領が悪い人間では全くなく、多忙を極められている方々です）。会社あるいは大学に就職した直後に、ある種の行動指針を与えてくれるような邂逅があったことは偶然であり、その偶然の恩恵を受けたことにも感謝しています。

さて、現在私は、今まで縁のなかった名古屋工業大学で新しい研究生生活を始めたわけですが（今年の今、まったく名古屋に来るとは思いもかけませんでした）、まさに初心に戻るよい機会だと思っています。抜け道や近道を見つけることに終始せず、お二人を思い出して正面から課題に取り組めるような本格的な人材になるよう、地道な努力こそを大切にしていきたいと思っています。それから、これは余計なことですが、私の2度の就職体験の直後に2度とも目標とできる人物に邂逅できた幸運から、名古屋の地で3度目の偶然もあるのではないかと少々期待しているところです。

末筆になりますが、東工大でのご恩を忘れず、世間の一隅を照らせるよう研究教育活動に精進して行く所存です。みなさまのご活躍とご健勝を祈念いたしますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

■ ■ さようなら "team570"

伊藤正人（九州大学先端物質化学研究所・准教授）

チューリヒのスイス連邦工科大学（ETH）の François Diederich 先生のもとで博士研究員をしていた私に、「東京工業大学の化学工学科に碓屋隆雄先生が新た

に研究室を立ち上げられるので助手を探している、については日本に戻ってきて面接をうけてみてはどうか」との連絡が入り、気楽なポスドク生活がにわかにかんしゃくになったのは今から10年以上も前のことです。27年暮らした京都を出てチューリヒに1年暮らした程度の人生経験で「東京に行ったら大きな化学をやろう」と妙に肩に力が入っていたことが、気恥ずかしさとともに懐かしく思い出されます。幸いなことに採用の運びとなり、東急電鉄の駅の地下化工事が完成間近の大岡山に通い始めました。東工大での生活は春先から新しく配属された3人の4年生とともに南1号館の570号室に実験室兼居室をつくることからスタートでした。古い木製の実験台の側面をペンキで塗装し、デコボコだった上面に合板を貼り、Lアングルを取り付け、真空ラインを設置、アルゴンラインを敷設する一方、ロッカーや本棚をキャンパスから拾い集め、電源コンセントやLANなどのユーティリティを自作する日々はあっという間に過ぎ、実験室が満身に稼動し始めたのはすでに蟬の鳴き声も静かになった初秋のことでした。ETHの先進的なインフラストラクチャーとは対照的に、「世界最高の理工系大学」のはずの東工大が研究のスタートまでに半年かかる状況に時折苛立ちを覚えました。出来の悪い子ほどかわいい、とはよく言ったもので全て手作りの570号室には愛着がわき、その後総勢24名の学生を受け入れながら10年以上にわたり籍をおくことになりました。その間”team570”となった学生達の情熱と信頼に応えるために、「放っておいてもいずれ他所の研究チームがやりそうな事」を競ってやるのではなく、永く振り返ってもらえるような「色褪せない化学」をできる限り発信しようとアイデアを練った日々が思い出されます。ドラフトの吸気で廊下から吸い込まれてくる埃にまみれながらの毎日は、清々しくクリーンなスイスの研究環境とは対照的でしたが、フレッシュな実験結果を目の前にして学生と共に悩み共に感動を味わえる一体感は私にとってかけがえのないものであり、何よりもキラキラと輝いていたように思います。

奇しくも本年6月、南1号館の耐震補強工事に伴う研究室の引越と私自身の九州大学への異動が重なり、新設された東2号館での新たな研究生生活を体験することなく東工大を去ることになりました。それに先立ち南1号館での研究生生活にピリオドをうち荷造りを済ませた後、実験室の設備が少しずつ取り去られ解体されていくさまを目の当たりにしましたが、その様子は10数年前に空っぽだった部屋にいろいろなものをインストールしていった当時の光景を、まるで時計を逆戻しにして見ているようであり、ついに570号室が生まれた当初の姿に戻ってしまったときには諸行無常の感を禁じ得ませんでした。



解体されつつある南1号館570号室



棚の裏で使われなくなった壁掛けハンガー



引越作業のひとつコマ



真新しい東2号館の屋上より洗足池方面を望む

私が東工大でお世話になった10数年は、好奇心をくすぐりさえすれば邪心なく実験に取り組む素直な化学好きの学生達に囲まれて、とても幸福な時代だったと思います。そんな彼らを私が出会うまで育てこられた人たちに敬意を表しつつ、彼らの輝ける個性をさらに伸ばしていくために、自分は大学で何をしてあげられるのだろうとよく考えました。真直ぐな彼らには教えることよりもむしろ教えられることのほうが多かったかもしれませんが、彼らが卒業する時に会った時よりも逞しくなった様子を見るにつけ、あながち自分が関わったことも無駄ではなかったと安堵したものです。そして、研究をやり遂げた自信を糧に希望に満ちた人生を切り開いて行ってほしい、と願いながら桜舞い散る大岡山で毎春彼らを送り出したことをしみじみと思い出します。

最後になりましたが、私の570号室における研究生活を寛大に見守ってくださった碓屋先生と桑田先生、また励ましてくださった近隣の諸先生方に深く感謝いたします。一人一人の学生達の笑顔の記憶で満ち溢れた私の東工大時代は、今後の私の教育研究の大きな支えになると思います。本当にありがとうございました。

新任教員挨拶

■飯島 悠介 助教 (2009年5月着任)

5月1日に助教として着任しました飯島悠介と申します。よろしくお願い致します。私は1999年に東工大第3類に入学し、飛び入学により大学院へ進学しました。大学院では応用化学専攻の高橋孝志教授、土井隆行助教授（現東北大学教授）のご指導のもと2007年3月に学位を取得いたしました。

子供のころから自然に興味を持ち、都会の少ない自然を相手に昆虫採集、植物採集をしたり、天体観測をしたりしていましたが、次第に身の回りの物質の基本単位を扱う化学に対する興味が強まってきました。高校入学後は特に有機化学に興味を持ち、大学では有機化学を学び研究者になりたいと思うようになりました。

自分の作った化合物が実際に社会で使われることに興味を持っていたので、理学系より工学系に進もうと思い、東工大の第3類に入学し、2年次より応用化学コースに進みました。3年次になると飛び級の資格を得ることができました。元来、チャレンジすること、人と違うことをすることが好きであったため、思い切って飛び級してみることにしました。1年短くすることで卒業はより厳しくなりますが、幸い規定の期間で学位を取得することができました。

大学院では2つの天然物合成に携わり、パラジウム触媒を用いた反応から、ペプチド合成、ケミカルバイオロジーに関する研究を行いました。有機合成の基礎のみならず、生物をはじめ幅広い分野の知識、経験を積み重ねることができました。

学位取得後はデンマークのカールスバーグ研究所へと留学する機会に恵まれ、Meldal 教授の指導のもと1年半博士研究員として働きました。多国籍なグループで様々な文化、考え方、言葉が入り混じり、とても刺激的な生活でした。研究以外でも多くのデンマーク人、デンマークに暮らす外国人、現地在住の日本人の方々と交流することができ自分の視野を広げることができました。また、勤務先がビール会社であったため、タダでビールを飲めるという恩恵にもあずかりました。

帰国後は半年間ほど高橋教授が創設した東工大発ベンチャー企業のケムジェネシス社にお世話になりました。短期間ではありましたが、ビジネススペースでの化学、研究の進め方について学ぶことができました。また共同研究を通じ、新たな知識、人脈を得ることができました。

そして5月より縁あって高橋・田中研究室に助教として戻ってくる機会を得ま

した。今度は学生を指導する立場となりましたが、ともに実験し、勉強し、ディスカッションすることでお互いを高めていければと思います。現在では今までの自分の研究をベースにしつつも、全く新しい研究テーマの立ち上げを行っており、学生時代、ポスドク時代と同じように実験に精を出しています。常に好奇心を持ち、チャレンジすることが、これからの時代どんな仕事においても求められると思います。自分自身この気持ちを忘れないようにして、学生にもそのような気持ちを自然にもってもらえるよう努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、研究者・教育者としてスタートしたばかりですので、桜花会の皆様からご指導・ご鞭撻をいただけると幸いです。

研究室紹介（岡本研究室）

ゴールデンウィークの余韻が残っている中、その直後の5月8日（金）に南1号館耐震工事に伴う新棟への引越しの説明会がありました。その席で引越しの先発隊として岡本研究室が11日（月）から引越しをするとの連絡を受けました。急遽その日の午後から実験装置の解体や梱包準備等にかかり、学生たちの大活躍によって無事期限内に新築の東2号館へ研究室を移動できました。今回、新棟に引越しをした研究室としてこの原稿を依頼がありましたので、初めに東2号館について報告させていただきます。

東2号館は本館と南1号館の間に位置し、化学専攻の東1号館に隣接しています。東2号館に移って最初に感じたことは、柱が太く見た目にも耐震強度があるということです。耐震強度がないために南1号館から引越しをする事になったわけですが、床、壁や廊下に多くのひび割れがあり、大雨が降ると雨漏りがする南1号館と比べると新棟は雲泥の差です。学生たちに評判がよい点は、和式トイレからすべて洋式トイレになった点です。ヒーター付きシャワートイレになったことも喜ばれています。ただ残念なことに建物が小さいために、隔階にしか男子トイレと女子トイレがありません。研究室内では、新棟のため電源の位置はほぼ要求通り設置され、たこ足配線をしなくても済むようになりました。また、ドラフトやフードも充実しています。高圧ガス法の遵守のため、1階に液体窒素と液体アルゴンのタンクを設置する設備があり、気化器を通して各部屋までガスが供給されています。学生居室と実験室は完全に分離され、一部の実験室では学生居室からガラス越しに実験室内が見えるような安全な構造になっています。

岡本研究室は東2号館の4階と5階にあり、実験室が1つ、分析室が和田研

研究室と共同で1室，それに教員室と学生居室がそれぞれ1室あります．この学生居室に，現在，修士2年が4名，修士1年が4名，学部4年が3名，計11名が在籍しています．そのうち中国からの留学生が2名います．約半数の学生が均一な細孔を有する多孔体カプセルなど新規多孔体の開発を行っています．多孔体カプセルは，触媒や薬物用カプセルなど様々な用途への利用が期待できます．残り学生は，高分子やイオン液体を利用した新規固体触媒の研究を行っています．研究室では，年2回泊まりがけで研究室旅行を行っており（多くの研究室では年1回に減らしたり無くしたりしているようですが），研究だけではなく学生間のつながりを大事にしています．実際，（教員を除いて？）みんな仲のよい研究室になっています．

研究室が新棟へ移ることにより，研究環境や学生の生活環境がかなり改善されました．このような環境を与えてくださいました専攻の教員の方々に感謝するとともに，新棟の建設の計画，設計，準備等に携わった教員方々および大学の関係者に深く感謝致します．この素晴らしい環境の下，これまで以上に教育および研究活動を邁進していきたいと考えております．今後とも皆様からのご指導・ご鞭撻を宜しくお願い致します．



東2号館の玄関にて

卒業生から

■ 2009 Silicon Valley 状況

石井 義行（旭化成（株））

昭和 61 年応化コース、63 年修士（佐治研究室）

昭和 58 年に東工大に入学し、修士修了後、旭化成に勤務している石井義行です。このたび、桜花会同窓会に寄稿の機会を頂きありがとうございました。

旭化成に入社以降、母校東工大で学んだ事柄を实践すべく開発現場での業務を遂行しておりますが、現在は、弊社の米国西海岸拠点（Mountain View; Silicon Valley）に滞在しております。Silicon valley は、Yahoo, Google の IT 系を中心とした Venture 企業が多く集まっており、全米の 70% の Venture 企業がここ Silicon Valley に存在するとも言われています。今回は、西海岸での仕事を通して感じていることを中心に記載いたします。

1. Silicon Valley の特徴

San Francisco, San Jose 間の湾に面した地域（Bay Area）は別名 Silicon Valley ともいい半導体企業（HP, Intel, Apple）の勃興の地として有名ですが、近年は、半導体企業以外のベンチャー企業が数多く存在します。Venture 企業とは大学等で培ってきた技術を実用化すべく起した会社であり、創業期は売上も無いので、投資家（Venture Capital）から資金、及び、会社経営に必要な事柄を獲得しつつ、実用化に向かっていている企業のことを言います。

Silicon Valley に Venture 企業が集中している理由は、Stanford 大学、UC Berkeley 等の有力大学が存在することもありますが、会社を興す上で必要な“物・人・金”が整っていることにあります。また、ベンチャー企業と面談していると、前職は〇〇の Venture 企業で仕事をしていた等の話もよく聞きます。その会社を調べてみると、うまく進んでいるものもありますが、逆につぶれているものも結構あります。ここからもわかるように、西海岸特有の気候も影響していると思いますが、Silicon valley には“失敗を恐れない”風土が醸成されています。

大学や Venture 企業だけでなく、世界の冠たる会社の中央研究所、事務所等も、この地に存在することも重要なことで、大自然に囲まれた環境でありながら、Silicon Valley に居を構えていると、世界最先端の技術情報に接することができます。

会社を興す上で必要な物事が豊富であること、失敗を恐れない風土が熟成されていること、さらには世界最先端の情報へのアクセスの利便性、以上 3 点が、Venture 企業が Silicon Valley に集中する理由の一つでもあると感じています。東

海岸の大学 (Harvard, MIT 等) の研究者が、研究成果を実用化する場合は、東海岸でなく西海岸で企業するという話もよくあることです。

2. 最近のベンチャーの動き

Google に代表された IT 系ベンチャーバブルののち、環境技術に特化したベンチャーが多く見られるようになってきています。この分野はいわゆる Clean-Tech と呼ばれています。Clean-Tech は、PV、Fuel Cell 等の Storage Device、Cellulose Ethanol, Bio Fuel 等の Bio Technology、さらには、Smart Grid 等の IT からシフトした Software 技術まで多岐にわたっています。このうち、一部の Software 分野を除いては Clean-Tech 企業の技術領域は、化学工学、応用化学の技術を発揮できる分野でもあるので、化学工学科出身としては、非常になじみやすい分野でもあります。

Venture 企業にかかわらず、アメリカの研究開発は”新しいコンセプト”を構築し、そのコンセプトのユニークさで差別性を具現化していく志向が強いと思います。その意味では、日本人技術者としては勉強になる部分が多いですが、一方で、製品化・商品化における（泥臭い）経験は得意でなく、自分達がすべき仕事ではない、といった感覚も感じる場面があります。GM は車の心臓部であるエンジンの設計さえ、外注していたとの新聞報道も聞いたことがあります。

Clean-Tech 分野は、製品・商品開発が重要であるので、Venture で生まれた新しいコンセプトを実用化し、Clean-Tech 分野において社会への貢献を行うためには、化学工学・応用化学の技術を活用しなければならず、まさに、桜花会の諸先輩方、後輩の皆さんの活躍が必要な所と感じています。

3. 日常生活



(写真 : Dish よりふもとの Stanford 大学周辺の風景)

物価は全米一ですが、四方を大自然に囲まれた環境は、非常に恵まれていると感じます。以前、英国に滞在していた時は、家族同伴での滞在でしたが、今回は家族を横浜に残しての駐在です。ともすれば、パソコンと向かい合っただけで週末を過ごしてしまいがちですので、積極的に身体を動かしています。身体を動かすには、California は非常に恵まれた場所であり、平日は毎朝 4 mile のジョギング（添付写真は、毎朝のジョギングコースである通称 ”Dish” から見える Stanford 大学）を行い、週末は近郊の Trail を散策しています。California には、Yosemite, Sequoia, Death Valley 等の National Park が点在していますので、少しまとまった休みには大自然を満喫しながらリフレッシュしています。

同窓会報告

■ 昭和 37 年化学工学課程卒業生同窓会報告

小野嘉夫（東工大名誉教授）

昭和 37 年（1962 年）化学工学課程卒業生の同窓会を、本年 6 月 12 日（金）18 時より、百年記念館角笛で行いました。当日は、桜花会の総会、講演会があり、この日に合わせて開催したものです。参加者は 20 名でした。参加者の年齢も古希前後となりました。恩師の尾崎萃先生、早川豊彦先生にもご参加いただきました。また、会のはじめには、大倉副学長より、大学の現況についてご説明していただきました。

この年の化学工学課程の卒業生の総数は 124 名で、当時まだ、類も学科もなく、同窓会としては、4 年次の卒業論文の指導教官の専門により、応化会、化工会、藍友会（染料化学系）、電化会（電気化学系）、窯友会（無機材料系）に分かれて所属しました。応化会メンバーは全体の約 40% でした。

参加者は少なめでしたが、その代わり、参加者全員が近況を披露する時間があり、愉快的な時間を過ごしました。現役でバリバリ働いている者あり、ボランティア活動や趣味にいそしむ者あり、それぞれに元気な生活を語っていました。おわりに、2-3 年後の再会を約束して散会しました。

最近の大学から

■ 応用化学専攻の今は？

和田 雄二（応用化学専攻 教授）

平成 21 年度が始まり、すでに 5 ヶ月過ぎました。昨年度から教員構成メンバー、そして研究・教育環境にも変化がありました。落ち着いたところで、桜花会会員の皆様に応用化学専攻（化学工学科応用化学コース）の現在の状況をお伝えしたいと思います。

活発な人材交流

昨年度から振り返りますと、20 年度 5 月に田中浩士先生の准教授への昇任、8 月には伊藤繁和先生の准教授採用がありました。伊藤先生には東北大学から赴任していただきました。3 大学工学系人材交流プログラムにより東工大で 3 年間、教育・研究に貢献していただいた山本芳彦先生は、21 年 3 月末で名古屋大学に戻られました。

今年度になってからは、中山将伸先生の名古屋工業大学准教授、伊藤正人先生の九州大学准教授へのご栄転という喜ばしい出来事がありました。また、5 月に助教として飯島悠介先生が採用となりました。

新しくメンバーとして加わっていただいた方々には、専攻の今後の発展を支えていただくために力を振り絞っていただきたくお願いいたします。新天地に職場を構えられた方々には、今までのご貢献に感謝すると同時に、今後のご発展をお祈りいたします。

現時点での教員は以下の構成です。

有機分子設計分野

高橋孝志教授、田中浩士准教授、布施新一郎助教、飯島悠介助教

無機合成化学分野

岡本昌樹准教授

触媒反応設計分野

碓屋隆雄教授、桑田繁樹准教授

有機反応設計分野

三上幸一教授、伊藤繁和准教授、相川光介助教

錯体反応設計分野

鈴木寛治教授、高尾俊郎准教授、大石理貴助教

工業物理化学分野

和田雄二教授、山中一郎准教授、望月大助教、中森建夫助教

生体機能分子設計講座

土井隆行連携教授（東北大学教授）

物質科学専攻物質変換講座

建物が変わる



東2号館玄関



東2号館を見上げる

南1号館（昔の北棟）の老朽化が問題となっていました。ついに西側改修、東取り壊しとなることが決まりました。今は、西側入居研究室が東側に一時避難しており、西側の耐震改修が行われていますが、これが終わりますと、西側への移動入居に続き、東側が取り壊されます。南1号館近隣にふたつの新棟が建ちました。このようなことになった経緯は、2007年9月の桜花会同窓会誌に鈴木寛治先生が書かれています。

新しく建った建造物は、東2号館と南4号館です。東2号館は、南1号館と本館の間、南1号館東側に隣接しており、南4号館は南1号館をはさんでちょうど反対側です。東2号館には、応化専攻（化学工学科応用化学コース）から碓屋・桑田研、和田研、岡本研、鈴木（榮）研が入居しています。南4号館には、化学工学専攻の研究室と講義室等があります。東2号館の玄関ならびに建物を見上げたところを写真に撮りました。1階には、NMR等大型機器の共通管理室があります。また、最近の大学キャンパスの特徴ですが、南4号館の1階にはセブンイレブンがあり、その横には軽食スペースが設けられています。お寄りの際は、ご利用になってみてください。南1号館の耐震改修は今年度末には終わり、新しい姿の南1号館が望めるはずです。

最終的に応用化学専攻（化学工学科応用化学コース）は、本館（高橋田中研、三上伊藤研）、東2号館（碓屋桑田研、和田研、岡本研、鈴木（榮）研）、ならびに南1号館（鈴木高尾研、山中研、佐治研）と、3つの建物に分散した形となります。建物が新築され、改修されることはうれしいのですが、専攻研究室の分散は、研究教育という応化専攻のメインワークからは必ずしも歓迎できる

ことではありません。今後将来、同専攻内研究室の集中配置を意識したキャンパス整備計画を訴えてゆくこととなります。

応化会の種々の事業の折に現状をご覧ください。今後も皆さまの支援をお願いいたしたく、よろしく願いいたします。

■ 百名山病

佐治 哲夫（物質科学専攻 教授）

百名山の一つである北海道のトムラウシ山で多数の中高年登山者が遭難したことは、私のような中高年登山愛好者にツアー登山に潜む危険性を教えてくれました。

私は、東工大在学中に新田次郎の「孤高の人」や深田久弥の「我が愛する山々」に刺激され、関東周辺の山々を一人で登るようになり、今でも週末には近郊の山々に登っております。

50代になり、深田久弥が選んだ百名山の中で私が登った山を数えたら30山程度でした。これから山に登れる年月も限られているので、最近はまだ登っていない百名山を中心に登るようになりました（百名山ばかりを登る人を百名山ハンターとか百名山病と言う）。とはいえ、私が既に登った百山の大部分は関東近郊の奥秩父、奥日光、八ヶ岳等の山々であります。一方、登っていなかった百山の大部分は、遠くてお金の掛かる北海道の山々、険しい南北アルプス、遠い東北の山々でした。その後、これらを年に3～5山登ってきましたが、46山にとどまっております。

最近、百名山に行くと必ず出会うのが、山の中腹で疲労や足のケイレンで動けなくなったツアー登山者です。しかも、ガイドはこの人達を置いて先に行ってしまうのです。彼らと話すと、ツアー客は、全国から集まっており、年齢、体力もバラバラで、登山の経験も浅く、山の難易度も知らずに参加しているようでした。このような現実を目の当たりにしますと、今度のような遭難は起こるべくして起きたのではないかと思われまます。

登山は、観光気分のツアーで行くものではなく、日常体力を維持し、十分に山の下調べをし、天気予報に細心の注意を払って行くものです。

大学でもマッターホルンで滑落したり、甲斐駒ヶ岳で行方不明になったりした教員がいます。私が山で遭難したら多くの人に迷惑を掛けるだろうと思いつながら、今夏も百名山である薬師岳、黒部五郎岳、笠ヶ岳に登る計画を立てております。私の百名山病につける薬はないようです。

40年の永きに亘りお世話になりましたが、来年3月末日定年を迎えることになりました。桜花会の幹事の方からは、書くことは山ほどあるだろうと原稿の依頼を受けましたが、40年東工大で勤めることが出来たこと事態、最初に皆さんに感謝せねばなりません。私は昭和43年4月富山大学から東工大の理工学研究科合成化学専攻の修士課程に入学、笠井俊保（名誉教授）研究室にお世話になり、45年修士を修了と同時に助手に任用されました。当時はまだ紛争中で大学の授業は再開されていましたが、この年から大学の改革が始まり、まず類別入試が実施されました。研究室ではナフタル酸化合物やナフトキノン化合物等の機能性色素の合成研究を行なっていました。その他に、それまで1,2年生の学生実験は全学理学部をお願いしていましたが、2年生は類別に専門の実験として46年度からスタートさせることになり、その責任者に笠井先生がなられたため、学生実験室の環境整備や実験テーマの作成等のお手伝いに任用初年度は忙しかった記憶があります。笠井先生の退官後、後任として相澤益男（前学長）先生が来られましたが、新しく出来る生物工学科の基幹講座に替わりましたので、昭和58年から工学部化学工学科共通助手に移籍し主に学生実験をお世話することになりました。移籍当時は7名の共通助手がおられ2年生と3年生の学生実験を担当されていましたが、人員削減等で私が最後の1人になり、その後の大学院の重点化により応用化学専攻に移り現在に至っています。組織替えや学科増設などいろいろありましたので、学生実験で教えた学生の学科も化学工学科、合成化学科、高分子工学科、電気化学科、無機材料工学科、生物工学科、生体分子工学科、開発システム工学科に及んでいます。学生数も履修者名簿から振り返りますと約5千名になり、我ながら驚いています。この中には、親子二代の方も数名おられ、年の永さを感じています。

そんな学生実験で昔から続いているものの一つに、2年生の四月実験開始前に顔写真を撮ることが挙げられます。この写真は教員が学生の名前を覚えるために撮り始めたようですが、卒業後の同期会に借り出された幹事さんは、学生時代の思い出話のきっかけとして大変重宝したとのこと。2年生といえば丁度成人式を迎える歳です。文化人類学の研究ではありませんが、この写真の顔は明らかに時代の変化を映しており、昭和生まれに比べ、平成生まれの学生は子供っぽく感じるのは、大変興味深いところ。最近の個人情報保護法のこともあり管理には気を使いますが、もう一つこの写真は、大学紛争後のある時期、学生実験の替え玉出席を見つけるのにも一役かっています。最近のまじめな学生からは想像できないことですが、実験を見回っていたところ見慣れ

ない学生がいるなどと思い写真で確かめたら別人で他学科の1年生、本人は金沢に旅行中とのこと。こんな例が機械系の学生実験でもあり、当時1回何千円かで代役のバイトが流行していたらしく、有名教授の講義でもあるまいし、私には未だ理解できない出来事です。

学生実験で特に苦労したのは昭和63年度から生物系2学科、80人が増え、1学年200人になった時期です。予算も4千万円程戴きましたが、実験台等の環境整備からテーマの作成と大変苦労しました。有機化学の合成屋が生物や無機のテーマを作ったり、事務方に交渉に行ったりいろいろの経験を致しました。4年間の御一緒でしたが生物系学科には女子学生も多く、実験室が華やいだ時期でもあり、また多くの先生方との出会いもあり、懐かしい思い出の一つです。

昔に比べ良くなったことは、西4号館（旧第4新館）の学生実験室が平成15年度の改装工事でシャワーや洗眼器も備えた、「世界最高の理工系総合大学」をめざす大学に少しは相応しい実験室になったことです。昔の汚い実験室で実験された会員の方は、一度大学祭にお越し頂いてお確かめ下さい。一方実験内容に関しては、3年生は度々時代にふさわしいテーマに替えてきましたが、2年生は基本操作を修得することも大きな目的でもありますので、半分程が新しくなりましたがε-カプロラクタムのようにまだ続いているテーマもあります。同じテーマを教えるにしても、最近は高校であまり実験をしていないことや不器用な学生が増えたこと等から、指導する助教の先生方は、昔に比べ大変苦労されていると感じます。私もあまりにひどい操作をしている学生には、山本五十六の言葉「やって見せ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かず」に習って実演をしながら、実験の楽しさ、面白さを語ったりしてきました。学生からは厳しい先生との声も伝わってきますが、何はともあれ40年間大きな怪我をする学生もなく終えられることは私としては大変嬉しいことで、これも学生実験に携わって頂いた先生方のお陰と心から感謝します。

最後に桜花会の益々の発展を祈念いたします。

■最近思うこと「今どきの若い者は・・・」

山中 一郎（応用化学専攻 准教授）

「今どきの若い者は・・・」世界中どこでも、何年たっても言われ続ける言葉です。少なくとも3000年は言われ続けています。社会的な変化と人の変化に不安を抱き、少しだけ長く生きてきた人がつつい口に出してしまうつぶやきです。人は数千年たってもその内面は大して進化していないことの証明でもあります。それぞれの時代の人々が、時代の変化に不安を感じ、将来に不安を抱きな

がら生活しています。不安を感じているだけでは、良い方向には動いていきません。その時代その時代のキーマンたちは、将来を見据え、地道な活動を通じて将来の方向性を軌道修正することで、何とか人が生きながらえていると言えます。軌道修正できなかった社会（国）はやがては衰退し、吸収され、消失していくと思われまます。

よく言われるように、今の学生（日本人）はいろいろなものに満ち足りていて、数世代前の学生（私の先生方）が持っていた強烈な衝動、“何とかしなければいけない”といったような、意志は持ち合わせている学生はあまりいません。このような意志はしばしばアジアからの留学生から感じることができます。その時「今どきの日本人の学生は・・・」などとぼやいてしまうわけです。ぼやくだけなら容易なこと、マスメディアの解説者、コメンテーターと同じように、批評、コメントすることは極めて容易です。まともそうな批評を聞くと「あんたやってみたら」と思わず口に出てしまいます。何事にせよ実際に事に当たっている方は、自分自身を、あるいは対象事案を一步下がったところから自己批判的に批評することは極めて大切な要素だと思います。その批評を現実の問題としてフィードバックしなければ、単なるぼやきでしかありません。今の日本人の学生にどのようにして、意志を受け付けられるかが大きな課題です。

頭のいい学生（言い換えれば高性能 CPU 搭載 PC）はいくらでもいます。化学における実験テクニック（アプリケーションソフト等）がいくらすばらしくとも、考え方や感情などの精神的側面（基本 OS）がボロボロでは何の役にも立たず、何も生み出しません。入学試験などは CPU の性能評価でしかありません。学生の意志だけでなく、生まれてから培ってきた心の成長の不具合が大きな問題となっています。東工大の教員ができることは、教育研究活動を通じて心の不具合を修正する手助けをし、かつ地球温暖化、環境保全、エネルギー、食料問題、医療など、解決しなければならない問題が山積されていることを認識させ、彼らの意志が芽生えるように啓蒙することぐらいかも知れません。恵まれた能力を持った人が実際の難問解決に貢献できるはずです。真のエリートとしての心と意志を植え付ける努力をするしかありません。ただお金を持っていることだけで評価される時代は破綻しています。

桜花会賞受賞者の声

桜花会では毎年、大学院博士課程の学生が選考した優秀な卒業論文発表者に対して桜花会賞を授与しています。平成21年3月の桜花会賞受賞者に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

◆名村 響 (鈴木・高尾研究室)

昨年の卒業研究発表では桜花会賞を頂きありがとうございました。発表の日からあつという間に3ヶ月が過ぎ、現在大学院の授業に追われる日々が続いています。また、改装工事のため研究室の場所が南一号館5階の西端から1階の東端に一時的に移り、新しい環境での研究生活がスタートしようとしています。

今改めて昨年の研究室所属から卒業研究発表までを振り返ってみると、まず原料合成に苦しんでいた日々のことが思い出されます。私の研究は当初二核錯体を用いて進めていく予定だったのですが、そこに至る以前の単核錯体の合成がなかなかうまくいかず精神的につらい日々が続きました。すでに合成法が確立されているはずの錯体すら合成できない自分は研究のスタートラインに立つことすらできないのではないかと、やっぱり自分に化学は向いていなかったのではないかと、などといった思いが頭をよぎり全てを投げ出してしまいたい気分になることもありました。結局2ヶ月間ほど苦しんだ後、OBの方の助言もあり原料合成はうまくいったのですが、この二ヶ月間のおかげで多少の失敗ではくじけることのない精神力を身につけることができたと思うと、決して無駄な回り道ではなかったと感じます。さて、めでたく(?)単核錯体が合成でき、今度は二核錯体の合成に苦しむ日々が始まりました。やっと合成できたと思った錯体の構造が予想していたものと全く違っていたりと、テキスト通りの操作を行えばうまくいく学生実験と研究のために行う実験との大きな違いを痛感すると同時に、少しずつ研究が面白いと感じられるようになりました。なかなか思い通りの結果が出ない日々が続きましたが今度は自分が新しいことをやっているのだという思いもありモチベーションを下げることなく研究を続けることができました。最終的に合成したかった二核錯体が単離でき、NMR室の中で一人歓声を上げたのは卒業研究発表の3週間前のことでした。発表には間に合わないかもしれないと思い始めていた頃だったのでその分喜びも大きく、おそらくこの一年の間で最も嬉しい瞬間だったと思います。

ついにやってきた卒業研究発表の日、口頭発表の際は前に出て観客席側を向いた瞬間、緊張のあまり頭の中が真っ白になってしまいましたが練習のおかげ

で完全に思考停止しながらも口だけは動かすことができました。ポスター発表の時は少し落ち着きを取り戻し考えながら話すことができたと思います。

最後になりましたが研究室所属から現在に至るまで温かくご指導いただいている先生方と先輩方にこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。卒業研究の一年間で得たものを糧としこれからも精いっぱい研究に取り組んでいきたいと思っています。

◆林 外茂彦（和田・山中研究室）

初めに、卒業研究発表会において、桜化会賞をいただいたことに感謝申し上げます。山中先生を初め多くの方々に熱心な指導、時には厳しい指摘をしていただき今回の受賞につながったと思います。

研究室に所属して初めの1ヶ月は実験台を作るため、枠組み立て、板の切断、ガス配管、電気配線、ガラス細工と工事業者のようにスパナを片手に過ごしていたことを覚えています。いざ実験を始めてからも、実験操作のテクニックから報告会のスライド作成までこと細かに先輩方から教わりました。自分のテーマを持ち実験を開始してからは、結果が出ず遅くまで残るキツイ時期もありましたが、学部3年生までとは比べ物にならない密度の濃いまた学ぶことの大変多い1年間を過ごすことができたと思います。

卒研発表の期日が近づき、発表練習でも先生や先輩方にポインターをチラつかせるな、スライド間は一拍置き、ゆっくり話せなど数多くご指導いただきました。今改めてスライドや発表原稿の ver.1 と最終版を見比べると、原形をとどめていないとはこのことだと痛感しています。発表当日のことはガチガチに緊張してしまいよく覚えていません。自分の順番直前は、休憩明けで前に立っている時間が長かったということもあり、階段教室にいっぱいの人に圧倒されてしまいました。しかし、いざ発表を開始すると前日の遅くまで研究室の同期たちと練習したおかげか、大きな失敗はなく終えることができたと思います。

現在は大学院に進学し講義もあり学部4年生とは違う忙しさ・緊張感と闘っていますが、卒業研究をさらに発展させ、修士論文に向けて今後も充実した研究生活、学生生活を送っていきたいと考えています。

最後になりましたが、あらためて熱心にご指導くださいました先生方、先輩方に感謝するとともに、研究だけでなく大学4年間の生活を支えてくれた両親に深く感謝したいと思います。

◆浅田 佳奈子（穂田・吉沢研究室）

先日の卒業発表ではこのような賞をいただき、ありがとうございました。受

賞者の発表の際に自分の名前が呼ばれたときは、まさかと思う反面、非常に嬉しく感じました。

私は現在、修士課程1年生として引き続き穂田・吉沢研で研究を行っています。学部4年の4月からすでに1年以上研究室での生活を送っていますが、まだまだ学ぶことも多く、非常に充実した日々を過ごしています。

さて、今回この文面を書かせていただくにあたって昨年度の自分を振り返ってみますと、ある変化に気づきました。それは、プレゼンテーションに対する考え方です。私はもともと人前で論理立てて話すことに非常に苦手意識を持っており、発表といえば面倒くさい、できないと考えていました。しかし研究室に所属してスタッフの方々や先輩方のゼミでの発表を見るたび、私もこんな風に発表したい、上手く説明してわかってもらいたいと思うようになりました。初めはなかなか自分の考えが思うように伝わらなかったり、発表資料が不十分でうまく行かないことが多かったのですが、スタッフの方や先輩方の資料や説明の仕方やその堂々とした雰囲気さえも模倣して、ゼミの回数を重ねるごとに、だんだんと自信が持てるようになってきました。「さっきの発表わかりやすかったよ」という先輩の言葉をいただいたときには大きな達成感がありました。

卒業発表では、午前に行われた口頭発表はやはり緊張しましたが、午後のポスターセッションでは非常にリラックスして臨むことができ、むしろ楽しかったとさえ感じました。異なる研究を行っている人と、自分の研究テーマについて議論するのは普段とは違う視点から考えることができ、発表しているというよりも、様々な人からアドバイスをいただいて、多くのことを学びました。

また、三月の終わりに行われた日本化学会の年会においてもポスター発表を行いました。当日も様々な大学の方と議論を交わすことができ、非常に楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。卒業発表のときとはまた違い、異なるバックグラウンドを持つ方と接する事で、他の大学の研究室ではどのような研究を行っているのだろうかという興味もわいてきました。

私が現在所属している化学環境学専攻は、様々な大学の出身者が在籍しています。穂田・吉沢研の現在の学生数は18人ですが、東工大卒の学生はそのうち4人だけです。また、学部どころに皆が同じ分野の研究を行っていたわけではなく、中には分析装置の研究を行っていた人もいます。このようにいろいろなバックグラウンドを持つ先輩や後輩に囲まれることによって、お互いに刺激しあい、知識の幅が広がり、興味の対象が増えるように感じます。

修士学生としてこれからさらに二年間研究を行います。昨年度の反省を活かし、より丁寧な研究を行いたいと思います。最後になりましたが、穂田先生、直接指導してくださった小池助教をはじめとするスタッフの方々、辛いときに

励ましてくれた先輩方、同輩に心から感謝いたします。ありがとうございました。

◆大角 和也 (高橋・田中研究室)

この度は桜花会賞に選んで頂き、ありがとうございました。まさか自分が受賞できるとは思ってもみなかったので、名前を呼ばれたときはただただ驚きました。正直なところ、卒論研究において思うような結果が出せず、とても胸を張って話せるような発表内容ではありませんでした。だからこそ、逆に開き直って当日を迎えられたのがよかったのではないかと今では思います。本番では、午前中の発表はある程度の練習をしていたため、あまり緊張せずに行うことができましたが、午後のポスター発表は、自分の研究内容を他の研究室の先生方、先輩方に説明するという初めての機会であったため、自分の順番が来るまではどのような質問が来るのだろうかとか怯えたり、とても緊張していました。しかし、いざ始まってみると無我夢中で、その時自分が何を話したかもあまり記憶に無く、気が付いたら終わりの時間が来ていて、ホッとすると同時に異常な疲労感に襲われたことを今でもよく覚えています。

さて、最近の近況についてですが、無事に大学院に進学し（実は発表時には卒業単位が揃っていないかわからない状態でした。ごめんなさい。）、受賞理由が分子がきれいだったということでしたが、残念ながら？今では別の化合物を合成ターゲットとして、授業等の合間を縫いながら、日々研究を行っているところであります。来たるべき修論に向けて今回の経験を糧にし、自信を持って話せるような結果を出せるよう、また研究以外でも人として成長出来るようにこれからの2年間を精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、卒論研究や現在の研究において、指導していただいた高橋先生、田中先生をはじめとする研究室の方々に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひします。

なお、頂いた図書カードは教科書を買うのに使わせていただきました。ありがとうございました。

長々とまとまりのない文章を失礼致しました。

◆中村 光孝 (山本研究室)

昨年度まで応化コースの山本芳彦研究室に所属していた中村光孝と申します。今年の4月からは大岡山からすずかけ台に移りまして、総合理工学研究科物質電子化学専攻の田中研究室に所属しています。去る3月の卒業研究発表会におきまして、桜花会賞をいただきましたことにあらためて感謝いたします。

今回このような文章を書く機会を与えていただきましたので、昨年一年間の研究室生活について書かせていただきます。昨年度の山本研の構成は、学部4年が3人、修士2年の先輩が3人の計6人であり、研究室の規模としては比較的小さい研究室でした。特に同期の2人は個性的で、1人は朝から晩まで実験台の前で奇声をあげているやつもいれば、もう1人は朝から晩まで10数時間も飯も我慢してカラムクロマトグラフィーをひたすらかけているやつもいました。このような環境で一年過ごしてきましたが、今振り返りますと少人数であることで学生同士間、そして先生との距離が非常に近く、非常に恵まれた環境で一年間研究に邁進することができたと思っています。特に研究室に所属して初めてのころは右も左も分からないヒヨっ子でしたが、はじめから対等な立場でディスカッションをしていただいた山本先生や修士の先輩方には本当に感謝しています。そして先生や修士の先輩方の研究に対する姿勢や深い化学の専門知識には驚かされ、すずかけ台に移った今でも先輩方を目標にして日々努力しています。

さて、昨年の4月に山本研に所属してからは、学部3年までの座学中心の生活から一変して朝から深夜まで一日中実験するという、それまででは考えられないような生活になりました。必然的に同期や先輩と共に過ごす時間は長いわけで、あっという間に打ち解け、研究に関係のあることからまったく関係のないことまで何でも相談し合える仲になりました。そんなこんなであっという間に一年間が過ぎましたが、一年がたつころには自分のテーマにも愛着がわき、研究の面白さと大変さの両面を感じられるようになりました。今は別の研究室に移って研究を続けていますが、山本研で教わった研究の進め方を今でも胸に刻み込んで日々精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、一年間ご指導をいただいた山本芳彦先生をはじめ、M2の先輩方や、ともに苦しみを乗り越えた同期の2人に感謝します。ありがとうございました。

◆沼田 幸伸（三上・伊藤研究室）

まず今回桜花賞を頂きありがとうございます。卒研発表が終わった後は、やっと終わったという解放感と達成感で全く桜花賞の事を考えていなかったのも、選ばれた事に驚いたのと同時にとてもうれしく思いました。

そもそも僕の卒業研究は順調といえるものではありませんでした。卒業研究のテーマは抗癌剤リード化合物の全合成です。全合成とは最小単位の化合物から天然物を合成していくというものですが、ある程度合成がうまく進んでもある一か所の反応でつまづいてしまえば、合成が達成できなくなってしまうとい

う難点があります。

僕の場合、今回のテーマでも重要とする反応がうまくいかず、1月の時点ではとても卒研として発表できるようなものでもありませんでした。そのため2月からは夜遅くまで頑張って実験する日々が続きました。卒研発表日の2日前に夜中3時まで実験したのはまだ記憶に新しいです。多少つらい部分もありましたが、自然と続けられたのも先生や助教の相川さんや先輩たちがフォローしてくれたことが大きかったです。相川さんは僕の実験を夜遅くまで手伝ってくれたり、パワポを作ってくれたりしました。またM2の先輩は修論発表が終わってから実験を手伝ってくれました。M1の先輩たちはすごくきれいなポスターを作ってくれたり、僕らの代わりに雑用までしてくれました。研究室全体としてB4の卒研発表に協力してくれたあの1ヶ月は本当に助かりました。

また同期のメンバーは本当に頑張っていました。実験がうまくいっている人もあまり順調にしていなかった人も、みんな卒研発表のために結果をまとめようとよく頑張っていて、モチベーションの高さには感心していました。

こういった環境に感化されたのか、正直まずいと思っていた実験結果も全然気にならなくなって、ただひたすら頑張るしかないなと思って実験に打ち込んだ結果、卒研発表前日にはなんとかまとまった結果までたどり着くことができました。本当に周りの人たちに感謝すべき一か月だったなと思います。

新しい4年生も入ってきて、研究室もまた活気づいて新たな研究室生活が始まりました。2年間この研究室でどれだけの事ができるか楽しみにしつつ、充実した研究室生活を送っていければと思っています。

「学生と卒業生との交流会」のご案内

これまでに、桜花会は学生への経済的支援、卒業祝賀会共催、講演会の開催、企業見学会、同窓会誌の発行、研究室見学会など学生と卒業生との交流の場を提供して参りました。そして、これらの活動を通して、学生の企業情報不足を実感し、「学生と卒業生との交流会」により相互理解を深める場を提供することは同窓会の重要な役割であると確信いたしました。つきましては下記の通り12月に「学生と卒業生との交流会」を企画いたしました。ご協力いただける会員の方は桜花会事務局までご連絡いただけますと幸いです。

記

- (1) 目的: 学生と卒業生との交流を図り、相互理解を深める。
- (2) 会の名称: 第1回「学生とOBの交流会」
- (3) 主催: 桜花会(東京工業大学応用化学系同窓会)
- (4) 日時: 12月12日(土)13:00~18:00(交流会各社20分X10社、懇親会1時間)
20分の内訳(15分会社概要説明、5分OB体験談)
- (5) 場所: 蔵前会館ロイヤルブルーホール(大岡山駅前)
- (6) 人員: 60名程度(学生30名、企業20名*、その他10名)
- (7) 参加企業数: 10社(先着順)
- (8) 参加費: 参加企業各社 1万円
- (9) 申し込み先: 堀尾までEメールでお願いします。horio-t@kuramae.ne.jp

*参加者は各社2名(卒業生、人事担当者など)を原則とする。

ご参考: 桜花会のHP <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>

桜花会総会・工大祭企画のご案内

例年、工大祭の開催に合わせて桜花会総会を開催しておりましたが、今年度は竣工したてのTOKYO TECHFRONTにて6月12日に総会を開催いたしました。一部の方には日程の変更の連絡が届かず、大変、申し訳ございませんでした。来年度も6月の開催を予定しておりますので、桜花会会員の皆様には、ぜひこの機会にご来学いただき、旧交をあたためるとともに、学生や教員とも交流を深めていただければと存じます。また、あわせて生まれ変わるであろう南1号館（旧北棟）の見学にも是非いらしてください。桜花会総会の詳細については桜花会ホームページ上 (<http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>) および蔵前ジャーナルの会告にて掲載する予定です。

また、例年通り工大祭桜花会企画では、研究室開放、ポスター展示を予定しております。

★★★研究室開放・ポスター展示★★★

日時 10月24日(土)、25日(日) 11時-17時

場所 東京工業大学 大岡山西4号館 2階学生実験室

卒業祝賀会のご案内

平成22年3月26日(金)予定

詳細は後日桜花会ホームページ、電子メールなどでご案内いたします。

会員の声

桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その振込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方が結構いらっしゃいます。事務局だけで楽しんで(?) いるのももったいないと思い、いくつかのメッセージをここでご紹介したいと思います。振込の際にはどうぞ一言お書き添えいただければと思います。

宮坂 伊兵衛 (S21 学士)

社会人の出席が少なくなり残念です。

西山 徳三 (S22 学士)

相変わらず元気で(株)人材活用センターに勤めています。

牧 廣 (S23 学士 論博士)

83才になりましたが、経産省の委託で研究開発したプラスチック製LPGボンベの実用性を果たすべく努力しています。

小林 盛 (S25 学士)

在学中の様子など、なつかしく思い出しております。

金網 久明 (S26 学士)

80才を迎えましたが元気です。

内田 盛也 (S 28 学士 論博士)

拙著を桜花会へ寄贈、別送致しました。

市川 惇信 (S33 博士)

近況は <http://www.a-ichikawa.com/> を。

伊澤 慎一 (S39 博士)

この10月に新著「高分子の基礎と応用」を上梓しました。

齊藤 正巳 (S41 修士)

東レフィルム加工株式会社にてREACH対応等に従事中です。

皆川 和夫 (S42)

65才を過ぎ、いまだに働いています。

栗原 重紘 (S44 修士)

「学んで時に之を習う。亦説ばしからずや」です。ISO講師として毎日出勤しております。

波々伯部 自克 (S46 博士)

現在、米国の法律事務 (oblon,spivak,McClland, Maier&Neustadt,P.C) に勤務しております。(Alexandria,VA)

橋本 恵一 (S47 修士)

オランダ駐在を終え、完全リタイアしました。

伊坂 晃 (H8 修士)

安曇野赤十字病院に勤務が移り転居いたしました。

天神林 隆一 (H14 修士)

丸善石油化学(株)にてプロセス開発の研究をしております。最近、車を購入しました。

大橋 理人 (H15 博士)

阪大院工に着任してちょうど1年です。

—あとがき—

昨年までの連続熱帯夜記録の更新続きの夏とは違って、今年の夏はちょっぴり涼しい夏でした。ですが、ゲリラ豪雨、竜巻など全国で気象災害が報告されており、喜んでばかりもられません。ぐずつき気味の天気の影響で、せっかくの7月22日の日食も観察できなかった方も多数おられるかと思えます。幸運なことに、大岡山では昼前に雲の合間から少しだけ「蝕まれた太陽」を見ることができました！次回の日食は意外と近く2012年5月21日に関東地方を中心に金環日食が観測できるそうです。期待しましょう。

今年は応用化学専攻にとっても南1号館の耐震改修、新棟の竣工と大きなイベントが盛りだくさんの年でした。多くの教員・学生が年度初めからの引っ越し作業に追われておりましたが、ようやく専攻も落ち着き始めた段階です。学生や教員たちは実験室や機器の整備で忙しかったとは思いますが、その忙しい合間を縫って原稿を完成させていただいた皆様のおかげで、桜花会誌を発行することができました。編集一同ほっとしております。どうも有難うございました。！(T)

平成 21、22 年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-S1-6

東京工業大学 大学院理工学研究科 物質科学専攻 佐治哲夫

Tel & Fax 03-5734-2627

E-mail: cherry@apc.titech.ac.jp

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>